

玄宗の平盧軍節度使育成と小高句麗国（承前）

日野，開三郎

<https://doi.org/10.15017/2328419>

出版情報：史淵. 89, pp.1-26, 1962-12-01. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

玄宗の平盧軍節度使育成と小高句麗國（承前）

日 野 開 三 郎

第五節 軍 団

平盧軍節度使管下の軍団と兵力とは開元と天寶とでその数に非常な開きがある。殊に天寶二年には大軍拡が行はれ、軍団の増設があつた。そこで考説も此の事実に対応して天寶元年以前と二年以後とに分つて扱ふのが理解に最も便利である。

第一項 天寶元年以前の軍団

資治通鑑^{卷二}一五^{卷一}天寶元年正月の条、通典^{卷一}七二^{卷三}州郡序目、旧唐書^{卷八}地理志・序文等によつて天寶元年の平盧管下の軍団名及び兵馬数を表示するに左の如くである。表中の平盧・盧龍兩軍の設置年次はそれぞれ方鎮表と新唐書地理志及び唐會要^{卷七}八^{卷七}節度使の項等に依つたものであるが、尚詳しくは四軍団共に本文に論究する。各軍団の現位置は、平盧軍と安東都護府とは先に考証した所に従ひ、渝関は滿鮮地理歴史研究報告第一冊所収、松井等氏「隋唐二朝高句麗遠征の地理」に拠る。渝関は臨渝関とも云はれ、又榆林関・榆関とも書かれ、早くより史に著れてゐる要地である。安東都護府は天寶元年には未だ燕郡に在り、遼西故郡城に移つたのは翌二年であるから、資治通鑑等が遼西故郡城の地を都護府としてゐるのは誤りとして訂正した。

表に依るに、天寶元年の軍団は四、そのうちの二は營州と安東都護府に、二は平州に在り、總兵力は兵三万七千五百

玄宗の平盧軍節度使育成と小高麗國(承前)(日野)

天宝元年平盧管下軍団・兵力表

軍団名	兵数	馬数	設置年	西曆	所在地名	現在地名
平盧軍	一六、〇〇〇	四、二〇〇	開元五年	七一七	營州治	朝陽県
安東都護府	八、五〇〇	七〇〇	同 七年	七一九	燕郡	義泉
盧龍軍	一〇、〇〇〇	五〇〇	天宝元年	七四二	平州治	盧龍県
渝関守捉	三、〇〇〇	一〇〇	缺 伝		臨渝関	山海関西方千邦里

人、馬五千五百匹となる。平州が幽州節度使の巡属から平盧藩に割属せられたのは天宝元年であるから、盧龍・渝関の二軍団が平盧の隸下に移されたのも此の年の筈で、開元末までの軍団は平盧と安東との遼西地区内二軍団に限られることとなる。

四軍団の沿革を考へるに、平盧軍の開元五年設置は既に論証した所で再考の必要はない。平州の盧龍軍は天宝元年設置と明瞭に書き伝へられてゐるが、平州は嘗て開元二年に安東都護府の護衛として營平鎮守使の軍団が置かれた所であるから、此の鎮守軍団との關係に於いてその沿革を再検討すべき余地がある様に思はれる。開元五年の平盧軍の設置と、此れに続く七年の安東都護府の平州から燕郡への進出は必然的に營兵鎮守軍団に大きく影響したと思はれるが、此の地の重要性から推して軍団が全く撤去せられたとも考へ難く、従つて鎮守軍団と盧龍軍との間の系譜的關係の有無をしらべる必要がある。詳細は便宜上後文に論述する。

渝関守捉の設置年次に就いては所伝が無い。然し滿華交通幹線に沿ふ軍事上の要衝としておそくも開元の初め頃、恐らくは更に溯つて則天武后の世の契丹人李尽忠等の叛乱頃に既に置かれてゐたのでは無いかと思はれる。開元年間の存在に就いては確証があり、詳しくは後述する。

最後に安東都護府であるが、此の場合の都護府は平盧・盧龍の二軍や渝関守捉と並べられてゐる所よりして、明かにそれらと並ぶ軍団としての用法である。都護府は理蕃機関であり、又州格の行政機関でもあり、それらの沿革に就いては既に述べたが、更に又軍団としての沿革の考察が必要なわけである。安東都護府を軍団の意味に使用してゐるのは、当時さうした慣用があつたからに相違ないが、本来は理蕃機関である安東都護府を以て軍団に迄転用するに至つたのは「安東都

開元二十五年幽州節度使管下軍団表

軍 鎮 名	所在州名	備 考
経略軍	幽州城内	牙軍
平盧軍	營州城内	
静塞軍	薊州城内	
威武軍	檀州城内	
清威軍	媯州城内	
横海軍	滄州城内	
高陽軍	易州城内	
唐興軍	莫州城内	
恒陽軍	恒州城内	
北平軍	定州城西	
渝関守捉	平州石城縣	
北平守捉	平州	
安東鎮守	燕 郡	

所在は本文参照
所在は本文参照

護府の軍団」と云ふ正確な表現の略としてであらう。安東都護府護衛の軍団は、平州時代には營平鎮守と呼ばれて居り、又後述する如く遼西故郡城時代には安東守捉と呼ばれてゐるから、燕郡時代にもやはり正式の軍団名を有してゐたと見る可きであらう。開元五年、營州を契丹から奪還して燕郡の復興に着手した時、此所に経略鎮と呼ばれる軍団を設けたことは先に述べた如くであるが、翌々七年、都護府が平州から燕郡に移されて来た時、先づその護衛の任に當つたのは必ずや此の経略鎮の兵であつたであらう。然し同時に又此の地の兵力が大いに増強せられたことも疑ひ無いから、経略鎮の名がそのままであつたかどうかは慎重に検討する必要がある。詳しくは此れ亦後述する。

六典^卷兵部に述べられてゐる八節度使は開元二十五年頃の状態を伝へたものである。従つて平盧は廢藩せられて幽州藩に併入せられてゐたのであるが、此の平盧の軍団を吸収した当時の幽州節度使管下の軍団は上表の如く十三を計へる。天宝元年の幽州節度使の軍団は九、平盧は四で

あるから、合計十三となり、軍団総数に於いての増減はない。又その軍鎮名は十一迄共通であるが、二は相異してゐる。即ち開元の北平守捉と安東鎮守は天宝元年には無く、その代りに盧龍軍と安東都護府とが天宝元年にあつて開元でない。安東鎮守は当然安東都護府に当るものと解せられるから、北平守捉は盧龍軍に当るものではないかとの考へが生れて来る。つまり燕郡時代の安東都護府の護衛軍団の正式の名称は六典に云ふ安東鎮守であつたことが確められると共に、北平守捉と盧龍軍との間に系譜的なつながりのあつたことが察せられるのである。

新唐書^{卷三}地理志・河北道の条に依れば、本道内には北平と呼ばれる地名が二つあつたことが認められる。その一つは定州所管の北平県である。その条下に

万歲通天二年。以拒契丹更名狗忠。神龍元年復更名。

とある如く、此所は契丹の河北侵入を防ぐ一要衝であつた。表によれば北平軍は定州城西に在つたと云ふから、恐らくそれは此の北平県におかれたもので、軍名はその地名に因んだものであらう。他の北平は平州の郡名としての北平である。

唐の各州の郡名は天宝三年に附されたものであるが、隋書^{卷三}地理志に

北平郡。統県一。戸二千二百六十九。盧龍。

とある如く、平州の郡名の北平は隋代の古名に因んだもので、天宝三年に初まる新しい名称ではない。北平守捉は此の平州治に置かれたものに相違ない、州治は盧龍県治でもある、して見ると、盧龍軍と北平守捉とは同じ平州治に在つたこととなる。先にも言及した如く、同一地に別の二軍団は併置しないのが唐朝の一貫した方針であるから、此の方針からすれば同じ平州治に在つた北平守捉と盧龍軍とは別の軍団ではなく、同一軍団の別名であつたと見なければならぬ。開元二十五年の史料に北平守捉の名が見え、盧龍軍の名が無く、逆に天宝元年の史料に盧龍軍の名があつて北平守捉の名が無いのは、北平守捉が此の間に盧龍軍と改められたことを示すものと解すべきであらう。盧龍軍の設置年次として伝へられてゐる

る天宝元年は、その実、北平守捉が盧龍軍と改められた年であらう。所謂軍鎮には、軍・守捉・城・鎮守等の別があり、軍は格式が最も高く、守捉・城・鎮守より軍に改められる時は「升」と云ひ、反対の場合は「降」と云ひ、単に軍名を改める時は「更」又は「改」と云つて、軍とそれ以外の軍団との間に格式的な一線を引いてゐた。盧龍軍は軍団としての沿革は開元時代の北平守捉に由来するが、軍としての出発は天宝元年で、それが盧龍軍の設置を天宝元年と書き伝へしめた所以と思はれる。同様の表現例は他にも見出される。

北平守捉のおかれた平州は嘗て安東都護府のおかれてゐた開元二年から七年まで營平鎮守使の軍団が置かれてゐた所である。安東都護府の燕郡への移転と共に都護府の護衛役としての軍団はもはや平州に必要でなくなつたが、此の地の奚・契丹に封する軍事的重要性から軍団そのものの必要性は依然失はれることなく、よつてさうした役割を荷ふ可き新たな意味を有つた軍団が引続き存置せられ、それが北平守捉であり、天宝元年、平盧藩に割隸せられる際に盧龍軍に升せられたものと解せられる。

開元五年の燕郡回収と共に此所に置かれた軍団は絳略鎮であつた。絳略鎮は遼西地区に於ける要地としての燕郡の鎮護の為に置かれたものであるが、開元七年の安東都護府の設置は此の地の軍団に従来の地方鎮護の外に都護府警護の新たな重任を加へることとなつた。然し別に別の一軍団を添置することは当時の方針が固く避けてゐた所である。そこで燕郡の軍団は此の二大任務に対応し得る強力な軍団に一新せられ、かくて此所に安東鎮守が生れ出たものと解せられる。理蕃機関としての安東都護府の機能を發揮させる為めの武力機関は平盧軍節度使であつて、安東鎮守だけの武力ではない。安東鎮守は都護府を衛る護身軍団であり、併せて燕郡を鎮護してゐたものである。

以上の考察に依れば、平盧・幽州兩藩を合せた河北方面の軍団数は開元二十五年から天宝元年迄の六年間を通じて十三に固定し、北平守捉が盧龍軍と改められた外、実質的な変化は無い。軍団数及び兵力数は開元・天宝時代を通じて増加一方

の大勢を辿つてゐるから、開元二十五年以前の軍団や兵力数がそれ以後に比して多かつたとは大勢的に考へ難い。平盧藩が平州及びその二軍団を領したのは天宝元年で、それ迄の軍団は平盧軍と安東鎮守との二つにすぎず、その兵力も開元末で兵員二万四千五百、馬四千九百であつたこととなる。開元中期頃の軍団兵力は或は此れより少く、二万程度であつたかとも思はれる。幽州藩の軍団は九、兵員数は九万一千四百人、それに天宝元年に平盧に移隸せられた平州の二軍団を加へた開元末の軍団は十一、兵員数は十万を越える。奚・契丹の強攻を受けた際の平盧が幽州藩の力に頼らなければならなかつた所以は此の軍団数及び兵力の關係にはつきり窺はれるであらう。

辺境配備の軍団には大兵団たる軍・城・守捉・鎮守等の所謂軍鎮の外に、五百人以下数十人程度の小規模な鎮・戍があつた。軍鎮が高宗の儀鳳以後に発達したものであるのに対し、鎮・戍は唐初以来の制であるが、軍鎮の発達するに連れて逆にその数も意義も減少し、開元時代には尙數百の鎮戍を存してゐたと云へ、辺防の任は殆んど全く軍鎮に移行し去つて居た。平盧藩の地区内にも鎮戍が置かれてゐたことはその若干の鎮戍名が伝存してゐることから確められるが、然し強力な奚・契丹の侵寇に対しては僅かに烽哨的な役割を果し得る程度にすぎなかつたと思はれる。先にあげた平州の二鎮十二戍中に見える紫蒙・白狼・昌黎・遼西等の諸戍、当時の文獻の諸処に散見する通定・懷遠鎮、旧唐書^{卷三九}地理志に見える陽師鎮・靜蕃戍等、遼西地区内の鎮戍名は必ずしも少くない。それらの現位置を逐一比定して行けば此の方面の形勢を明かにする上に大いに役立つこと疑ひ無いのであるが、史料乏しく、二三のものを除く外、その比定は事実上望み得可くもなく、且つ鎮戍の辺防時代は開元以前に既に過ぎ去つてゐるので、此所では鎮戍の考証は一切割愛する。

第二項 天宝二年以後の軍団

契丹・奚その他の強寇に対する防衛第一線に立つ平盧藩の遼西地区に於ける天宝元年以前の兵力が僅かに二軍団二万余にすぎなかつたのは、此の地方の生産の貧弱さ、此れを補給する輸送の困難さ等に制約せられた為めであるが、天宝二年

に入ると、恰もかうした経済的制約を無視するかの如き軍団の大増設が遼西地区内に於いて遂行せられてゐる。新唐書地理志・河北道の平州・營州及び州格としての安東都護府の条下を見るに、夥しい軍団の名が記されて居り、そのうちから安祿山の拳兵以前に置かれてゐたものを拾ひ出すと、長城内の平州では従来からの盧龍軍・渝関守捉の外に新增のものはないが、長城外遼西地区に於いては従来の平盧軍の外に懷遠・保定の二軍、従来の安東鎮守の後身と思はれる安東守捉の外に汝羅・燕郡・懷遠・巫閭・襄平の五守捉が挙げられており、遼西地区内で合計七軍団の増設せられたことを知る。以下此れら新旧軍団の位置や沿革等を出来るだけ考究することとする。

(1) 平盧軍

平盧藩の牙軍として最も古い沿革をもつ平盧軍に就いては此れ迄屢々色々の角度から述べ尽しており、今更附け加ふ可きものは無い。

(2) 懷遠軍

当時の遼西地区には同じ懷遠と呼ばれる地が二つあつた。その一は小高句麗との国境に近い今の北鎮附近に比定せられる懷遠鎮であり、今一つは營州の東北、今の四角坂土城の地に比定せられる懷遠である。此所は燕支城の所在地で、隋末に遼西郡が置かれた時その三管県の一たる懷遠県が置かれ、唐初に遼州が置かれた時その郭下県となつた所である。北鎮附近の懷遠鎮は營州から遠隔の地であるが、懷遠県の地は營州に近い。營州の地内に在りとせられてゐる懷遠軍は当然此所に置かれたものと見る可きである。懷遠軍と同名の懷遠守捉は懷遠鎮に置かれた軍団であらう。唐会要^{卷七} 節度使の項の每使管内軍の条に

懷遠軍。在故遼城。天宝二年二月。安祿山奏置。

とあるは、懷遠軍が遼州の故地に置かれたものであること、その設置は天宝二年二月で、安祿山の指揮に依つたものであ

ること等を明かにしてゐる好史料である。先に考証した如く、此所は開元末年の頃に順化州が置かれ、その郭下県としてやはり懷遠県が置かれた所であるが、此の順化州は新唐書・方鎮表・幽州の開元二十九年の条に

幽州節度副使領平盧軍節度副使。治順化州。

とある如く、開元二十九年には幽州節度副使兼平盧軍節度副使の治所とせられた。時の両節度副使兼任者は外ならぬ安祿山であつた。此の安祿山の出駐は突厥帝国の瓦解による奚・契丹・室韋等の万一の動搖に備へたものであらうが、その為めには必ずや相当の部隊を率ゐてゐた筈である。その屯駐部隊は恐らく平盧軍等の一部を差遣したものであらうが、やがてそれらの差遣部隊は此の地の重要性から独立常駐の軍団に更められて懷遠軍と名づけられ、それが天宝二年二月であつたのであらう。

(3) 安東守捉

安東守捉は安東都護府を護る軍団でなければならぬから、天宝二年以後は都護府が最後に移された遼西故郡城に置かれてゐたこととなる。平州に在つた時代の都護府の軍団は營平鎮守、燕郡時代は安東鎮守と呼ばれ、安東守捉は遼西故郡城時代の軍団を指す名称であつたと云へる。

(4) 燕郡守捉

燕郡守捉が都護府の去つたあとこの燕郡に在つた軍団の名称であることは云ふ迄もあるまい。今の義県に當る此所は、營州より北鎮等を経て小高句麗の首都遼陽に入る滿華交通幹線上の要地であり、又北方懷遠軍の地を経て契丹・室韋・靺鞨等の諸族に至る交通幹線上の要地でもあり、東北面控制の上に營州と並ぶ重要な地位を占めてゐた。都護府の護衛とは別に此の要地の鎮護の為に有力な軍団を必要としてゐたわけである。開元七年に都護府が入つて来る以前、開元五年の遼西地区奪回と共に早くも此所に経略鎮が置かれてゐるのはかうした必要に出たもので、天宝二年に都護府が去つた後の此

の地の鎮護の爲めに燕郡守捉が置かれてゐるのも同じ理由によつたものと考へられる。安史の乱後、平盧軍節度使は撤廢せられるの止むなきに至つたが、營州と燕郡とは引続き軍団がおかれており、唐会要卷七節度使の項の「每使管内軍附」、范陽節度使管下鎮安軍の条に依れば、燕郡守捉は平盧藩が撤廢せられてから三十余年を経た徳宗の貞元二年四月二十三日、此の地の領有者であつた幽州節度使により鎮安軍に升せられてゐる註192。時に幽州は所謂河朔三鎮の一として自立の態勢を張つて居り、奚・契丹の防衛にも自力一本で當つてゐた。鎮安軍の設置はかうした防衛の強化の爲めで、如何に燕郡が辺防上の要地であつたかを示すものである。燕郡守捉の設置年次は安東鎮守の去つた天宝二年内のことであらう。

(5) 汝羅守捉

汝羅守捉は汝羅に置かれた軍団であること、更めて云ふ迄もあるまい。汝羅が營州の東南二百七十里、大凌河下流右岸の一地に比定せられてゐることは先に述べた如くである。又安東守捉の外に汝羅守捉が並び存してゐたことは、安東都護府の所在地を汝羅に比定する従來の所説の誤りなることを立証する決定的な史料であることも先に述べた如くである。此の守捉の設置年次に就いては所伝がない。

(6) 巫閭守捉

巫閭は医巫閭山に因んだ地名で、此の山脈を負つた要地に置かれたものである。医無慮・医無閭・医母閭等とも記されて周礼・淮南子・漢書・後漢書等に見え、漢代には無慮県が置かれてゐた。今の北鎮（広寧）の地に比定せられ、医巫閭山はその西北に連亘してゐる。註193 巫閭守捉は此所に置かれたものであらう。此所は隋・唐・契丹時代を通じて營州・燕郡・遼西城・汝羅を経て遼陽に入る交通幹線上の一要地をなしてゐた。此所に守捉がおかれたのはそれが爲めである。設置年次は所伝がない。

(7) 懷遠守捉

懷遠守捉が遼河に近い懷遠鎮に置かれた軍団であることは先に一言した如くである。此所は隋唐の高句麗遠征に於いて常に作戦上の要地となつて居り、殊に隋の遠征に於いては糧秣の集積場となつて居たので、当時の文獻にその名が散見してゐるが、その正確な位置は判つてゐない。松井学士は此れを北鎮附近稍々東方に比定してゐるが、園田一亀氏は多少此れを修正して北鎮の東南に求め、今の三岔河以西の間に比定す可きものの如しとせられてゐる。此の守捉の設置年次も所伝がない。

(8) 襄平守捉

襄平は遼東郡の郭下県として早くより史に著れ、前漢より前燕に至る迄専ら今の遼陽の地を指してゐた。只後魏の時代に遼東郡を西に遷し、従つて襄平県も共に西遷したことがあり、その地は今の義県、即ち燕郡に比定せられてゐる。然し遼陽は小高句麗の国都、燕郡は燕郡守捉の置かれてゐた所であるから、たとへ襄平県の故地であつても襄平守捉の候補地たり得る所ではない。そこで更に遼東郡又は襄平県にゆかりのある地を求めると、今の新民県の附近、遼河の西なる遼濱塔の地に比定せられてゐる通定鎮がある。此所はもと高句麗が武厲邏と呼ぶ城を置いてゐたのを、隋の煬帝が大業八年の遠征の際に攻め取り、遼東郡及び通定鎮を置いた所である。降つて唐の貞觀十九年の遠征に於いては名将李世勣が營州を發して懷遠鎮に進むが如く陽動しつつ通定鎮より遼河を渡り遼東に侵入して高句麗を狼狽せしめてゐる。此の通定鎮に置かれた遼東郡は一に遼東新城とも云はれた。唐の高宗の永徽五年、高句麗は此の地から西方に出撃し、当時唐に味方してゐた契丹を攻め、却つて大敗してゐる。又開元末天宝初の渤海の北進に逐はれて來投した扈涅靺鞨を以て置いた扈涅州も亦此の地方に比定せられること、先に論証した如くである。降つて遼代には此所に遼州が置かれ、開原方面に住する所謂北女直を統轄する北女直兵馬司の府とせられてゐた。遼の首府臨潢府から東京遼陽府に入る交通幹線は此の遼州を經由してゐた。つまり通定鎮は遼東より遼西に入つて或は契丹に通じ、或は營州に往來する街道上の要地をなし、且つ懷遠鎮と並ん

で唐の直轄領の東端の関口を扼してゐたのである。懷遠・巫閭等に守捉が置かれてゐた以上、此所にも守捉が置かれぬ筈はない。襄平守捉は必ずや此所に置かれたものであらう。襄平なる守捉名は此所に嘗て遼東郡が建てられてゐたことに因つてゐるのであらう。但し此所は開元・天宝の交に来投した扈涅靺鞨人を以て扈涅州が置かれた地であり、扈涅州は小高句麗国に隸屬せしめられてゐたのであるから、此所に唐の軍団を置いたとすれば、相互の關係に就いて一考しておく必要がある。

通定鎮は唐の東北端に置かれた辺境の鎮である。鎮治は恐らく小さな聚落であつたであらうが、その管域は蕃地に向つて大きく拡がつてゐたであらう。扈涅靺鞨人はその管域内におかれたが、鎮の治所を居住地としてゐたのでは無かつたのであらう。そして守捉は鎮城に置かれ、扈涅人と相侵すことなく両存してゐたのであらう。此の守捉も亦設置年次の所伝がない。恐らく懷遠・鎮閭・汝羅等の三守捉と同時であつたのであらう。

(9) 保定軍

新唐書・方鎮表・幽州の天宝二年の条に

平盧軍節度使治遼西故城。副都護領保定軍使。

とあるが、既に考証した如く、右の平盧軍節度使は方鎮表の撰者が原資料に安東都護府とあつたのを敢て改作したものと解せられるから、原文は

安東都護府治遼西故城。副都護領保定軍使。

とあつたものと見る可きである。何れにしても此の記事に依つて保定軍は副都護を軍使とする重要な軍団であり、天宝二年には置かれてゐたものであることを知る。所で天宝元年の軍団名中には未だその名は挙げられてゐないのであるから、保定軍の名が文獻に始見する天宝二年は即ち創置の年でもあつたこととなる。

天宝十四年十一月、叛旗を翻して自ら南下した安祿山は、范陽（幽州）節度副使賈循をして范陽を、平盧軍節度副使呂知誨をして平盧を、別將高秀巖をして大同を、それぞれ留守せしめ、次いで翌至徳元年四月、平盧の呂知誨をして安東副都護馬靈督を誘殺せしめた。このことを資治通鑑^{卷二}一七は

安祿山使平盧節度使呂知誨誘安東副都護馬靈督殺之。

とし、単に副都護馬靈督と云つてゐるのみであるが、旧唐書^{卷一}四五劉全諫伝は

知誨逐受逆命。誘殺安東副都護・保定軍使馬靈督。云云。

とて、副都護・保定軍使馬靈督と云つており、副都護の保定軍使兼任が定制として安祿山の拳兵迄守られてゐたことを示してゐる。次に新唐書^{卷一}四四侯希逸伝に

營州人。^中略。天宝末為州裨將。守保定城。安祿山反。使中人韓朝敷命希逸、斬以徇。祿山又以親將徐焯道為節度使。

希逸率兵与安東都護王玄志斬之。云云。

とあつて、保定軍使馬靈督の被殺後もその部將侯希逸が勤王側に立ち、都護と協力して安祿山側に立つた節度使に対抗し、此れを攻め殺してゐる。保定軍の幹部のかうした活躍は強力な保定軍を背景にしてゐたからでなければならぬ。憾むらくはその位置を明かにすることが出来ない。太平寰宇記^{卷七}一河北道・營州の条にその四至八到を記して

東南至保定軍。旧安東都護府。二百七十里。

とあるは、保定軍に治してゐた副都護を都護と混同した記事で、史料としては全く無価値のものである。軍使たる副都護が勤王派として安祿山側の平盧軍節度使に誘殺せられたり、その將兵が平盧軍節度使に対する勤王側の攻勢の先頭に立つたりしてゐる事実から推せば、その治所は營州治から余り遠く無く、少くとも都護府に比して營州に近かつたのではないかとの推測が抱かれる。詳しくは後考を俟つ。

遼西地区内の軍団は以上に尽きる。あとは長城内平州の盧龍軍と渝関守捉とである。

(10) 盧龍軍

盧龍軍に就いては天宝二年以後特に考説すべき変遷は無かつた様である。

(11) 渝関守捉

渝関守捉に就いても附言すべき変化は無かつた様であるが、新唐書の地理志に此の守捉を營州の条に掲げ、恰も營州の域内に置かれたものであるかの如く扱つて居ることに就いてその所以を考察しておく。

渝関は隋書・旧唐書に渝関、新唐書に渝関・榆関、資治通鑑^{卷二二三・二一五等}に榆関と記し、胡註は「榆当作渝」と云ひ、重修永平府志^{卷二}も渝を正とすと論じてゐる。隋代には別に今の山西省の北辺に榆関があり、それとの混同を避ける意味では渝関が勝つてゐるが、別に何れが正誤であると論ずる程のことは無い様である。渝関は臨(林)渝関・榆林関等とも呼ばれ、新唐書^{卷三}地理志・河北道・平州・石城県の条に

石城県。本臨渝。武徳七年省。貞觀十五年復置。万歲通天二年更名。有臨渝関。一名臨閭関。云云。

とある如く、唐代には紛れもなく平州の管域に属してゐた。今の山海関の西方十邦里の地に当り、隋唐の高句麗遠征軍が遼東に往来する際はその都度此所を通過しており、当時の滿華交通幹線上の重要関門であつた。^{註20}契丹の侵入を防ぐ上にも長城線地帯の要衝で、渝関守捉がおかれたのはその為めである。所で同じ新唐書・地理志の營州の条下には渝関守捉の名をあげ、營州の西四百八十里に在りと記し、恰も渝関守捉が營州の域内に在つたかの如く取扱つてゐる。但し右の西は正しくは南西である。平州の渝関は長城に近く、その營州治迄の距離は右に云ふ四百八十里に略々當つており、従つて營州の西(南)四百八十里と云ふ説明は誤りでないが、渝関守捉を平州の条下に挙げないで營州の管下に記した取扱ひは明かに大きな誤りである。然らば何故に此の様な誤つた取扱ひが生れて来たのか。翻つて天宝元年の十節度使総叙の記事を願

るに、通典・旧唐書・資治通鑑胡註の三書共に渝関守捉の位置を營州の西（正確には西南）四百八十里に在りとしてゐる。此れは渝関守捉が平盧軍節度使に属する軍団であつたため、節度使に關する記事としての立場からその位置を示すにも會府たる營州治を基準とした迄で、渝関守捉が營州管内に在つたことを意味したものではない。新唐書・地理志の撰者は迂濶にも此のことを曉らず、「營州の西四百八十里」の記事を營州治の西四百八十里が營州の管域内に在るとの意に早合点し、よつて渝関守捉を營州の条下に入れたのであらう。

以上、天宝二年以後に於ける平盧藩内十一軍団の個々に就いての考説を試みたが、その結果、二年以後の増置にかかる新軍団は遼西地区の七で、その内容は懷遠・保定兩軍と安東・汝羅・巫閭・懷遠・襄平の五守捉となる。安東守捉は軍団名としては安東鎮守として従前から登場してゐたものであるが、二年に此れ迄軍鎮のなかつた遼西故郡城に移つたのであるから、實質的には新增に外ならず、逆に右五守捉の外に登場して来る燕郡守捉は軍団名としては全くの新顔であるが、安東鎮守が東に移された後におかれたものであるから、實質的には新增とはならないわけである。平盧藩内の軍団数は開元二十九年迄は僅かに平盧軍と安東鎮守との二つにすぎなかつたのが、翌天宝元年には平州の盧龍軍と渝関守捉との割属を受けて四軍団となり、翌二年以後は更に遼西地区内に七軍団の新增があつて都合十一軍団に達した。新設七軍団のうち、設置年次の明かな懷遠・保定の二軍と安東守捉とは天宝二年である。して見ると天宝一二年は平盧藩の軍団が急増せられた時期であつたこととなり、延いては設置年次不明の汝羅・巫閭・懷遠・襄平の四守捉も恐らくはやはり天宝二年であつたのであらうとの推測が抱かれる。天宝元年から三年迄は平盧藩の獨立時代であり、然も節度使は一世の怪傑安祿山であつた。七軍団の新增設と云ふ大軍拡はかうした条件の下に於いて初めて可能であつたと考へられるから、右四守捉の天宝二年設置とする推測は当らずと雖も遠くはあるまい。

平盧藩管下諸軍団に就いての個々の考察は以上に尽きる。個々の考察を通じて云へる最大の問題点は天宝元年から二年

にかけての大軍拡で、それが如何なる要請に応じ、如何なる目的を以て行はれ、藩の發展にどの様な關係を有つてゐたかが新に考察の対象となつて来る。

第三項 天宝初年大軍拡の意義

天宝元年より翌二年にかけて行はれた平盧藩の大軍拡に於いて最大の問題点となるのは、二年に於ける七軍団の増設である。元年の増領二軍は幽州から在来の軍団を割属せられたものであり、何れも長城内に在つたのに対し、二年の増設七軍団は悉く新設であり、然も長城外遼西地区にあるものばかりであつたからである。そこで先づ此の新設七軍団に就いてその意義を考へて見る。

新設七軍団のうち、所在の不明な保定軍を除く他の六軍団をその位置に就いて見るに、安東都護府郭下の安東守捉を初め汝羅・巫閭・懷遠・襄平の諸守捉、共せて五軍団が遼西故郡城及びそれ以東の地に置かれ、その先端をなす懷遠・巫閭・襄平の三守捉は小高句麗国との境界線たる遼河に近い地点に在つた。従つて此れら五守捉の設置は主として小高句麗方面に対する軍事力の強化を目的としてゐたものと見るを得よう。旧との安東鎮守のあとに置かれた燕郡守捉も遼西故郡城の安東都護府から西方四十里に当り、百八十里の距離をもつ營州よりも数倍都護府に近かつた。安東副都護が軍使となつてゐた保定軍も、その位置は不明であるとしても、營州よりも都護府に近在してゐたと見て誤りないであらう。都護府よりも營州に近かつたのは懷遠軍一つである。所で隋の大業八年、煬帝が遼西郡を設け、粟末靺鞨人突地稽を太守とし、その一党の力を以て大高句麗の西侵に対抗せしめんとした時、郡の所管とせられた遼西（郭下）瀘河・懷遠の三県はそれぞれ安東都護府（安東守捉）燕郡守捉及び懷遠軍の所在地であつた。つまり此れら三軍団の地は遼東勢力の西侵を防ぐ大凌河の天險に沿ふ要衝で、特に安東都護府の地はその中心をなしてゐたのである。此の様に考へると、懷遠軍・燕郡守捉の設置にも小高句麗方面に備へる意味が含まれてゐたと見て誤りないであらう。勿論、懷遠軍や燕郡守捉は契丹に備へる軍鎮

としての役割をも持たされてゐたであらうが、遼東の勢力に備へる役割を無視してはならぬ。

新設の諸軍鎮は大凌河流域以東、即ち遼西地区の東部に集中しており、従つてその所管州府は營州と見るよりも州格としての都護府であつたと解すべきであらう。新設の諸軍鎮は燕郡守捉と共に都護府治を中心としてその周圍を取巻いた形で散在してゐる。新唐書の地理志は安東・懷遠・保定の一守捉二軍のみを州格としての都護府の管域内におき、襄平・巫閭・懷遠・汝羅の四守捉を營州の管域内に置いてゐるが、四守捉を營州管内に置くはそれらの位置に視て頗る不合理で、先にも述べた如く渝関守捉を營州管内に置いてゐると同様、地理志の撰者の謬見と云ふ外ない。懷遠軍を都護府の管域内に置いてゐるのは、嘗て隋の遼西郡が懷遠県を管してゐた史実から推せば肯けないことはない。燕郡守捉も同様である。かくて州格としての都護府の管域は新設の七軍鎮及び燕郡守捉の所在地を包括する頗る広大なものであつたことを知る。此の広大な管域に対する州格としての都護府の行政力は多数軍鎮の布置によつて遽に浸透した筈である。天宝元年の營州の管戸数は九百九十七、燕郡に在つた都護府の管戸数は一千五百八十二で、共に一千戸前後であつたのに対し、都護府東遷後の管戸数が五千七百十八にも達してゐるのは、かうした広大な地域に対する行政力の浸透の結果であらう。

新設諸軍団が何れも小高句麗方面に備へる為めのものであつたとすれば、總數七にも表ぶ軍団の新設は唐の東北政策の重点が大きく遼東の経営に移されたことを意味する。遼東の経営に直接當つてゐたのは安東都護府である。安東都護府が東に徙り、その移転の年が七軍団増置と時を同じうし、共に天宝二年であつた所以は右の如き事情に在つたのである。

七軍団の増設に際しては当然兵員の増募があり、平盧藩の總兵力は増したことと思はれるが、平盧軍や安東鎮守から分遣せられたものとあつた筈であるから、七軍団の兵数がそつくりそのまま平盧藩の兵數増加であつたとは云へない。先掲の新唐書^{卷一四四}侯希逸伝に彼が營州の裨將として保定城を守つてゐたとあるは平盧軍將兵の新軍鎮への分遣の例である。

然しかうした分遣は新軍鎮創設の際の処置で、各軍鎮完成後は自給自足の態勢に移り、又平盧軍も補填せられ、結局、平

盧藩総兵力の大増強となつたであらう。

新設七軍団及び燕郡守捉の所在地は州格としての安東都護府の管域であつても、軍団そのものは総て節度使に直隸してゐたわけである。然し八軍団が都護府の管域内に所在し、遼東に備へる意味で都護府を援けて行かなければならぬ役割を負はされてゐたとすれば、八軍団と都護府との關係は当然濃密なものとなる。仮に都護と節度使とが衝突した場合、都護の立場は有利となり、それだけ都護府に対する節度使の威権は弱化せざるを得ない。それは藩政の運営に支障を来す恐れがあり、又奚・契丹が動揺した際の節度使の作戦にも影響する所なしとしない。かうした節度使の都護に対する相対的な威権の弱화를補強せんとしたのが平州管下の盧龍軍及び渝関守捉の割属、兵力にして一万三千人の転属であつたと思はれる。つまり天寶元年の平州及びその管下二軍鎮一万三千人の幽州節度使からの転属は翌年に於ける遼西地区東部の七軍団新設に連る処置であり、いはばその前段階をなすものであつたと解せられるのである。尚安東都護と節度使との対立は安祿山の叛乱を機として現実化するのであるが、此のことに就いては章節を更めて詳考する。

創設以来、大突厥帝国の威力を背景として暴掠を逞しくして来た契丹・奚に対する防制を藩の活動の中心としてゐた平盧軍節度使が天寶元年を界としてその重点を大きく東方の満洲対策に転換したのは、先づ第一に突厥帝国が開元末に互解し、それに従つて契丹・奚の暴掠も弱まり、对契丹・奚防制の劳苦から解放せられたためであり、第二に此の突厥の互解に乗ずる渤海の北進政策が遽かに活潑となり、満洲の形勢が大變化を来したためである。既に詳論した如く、渤海は純通古斯系靺鞨諸族併呑の宿願を達成すべく北征を敢行し、鉄利・越喜・扈涅等の有力諸部を悉く征服して直轄領民とし、彼等のうちの反抗分子は逃れて唐に投じ、唐はそれらの来奔諸部人を遼東に置いて小高句麗国の民に編入した。遼西地区東部に軍団を充実し、小高句麗国との国境に威圧的な軍容を布いたしたのは、来奔の靺鞨諸部人が小高句麗国内で妄動するのを監視し、更に渤海の新興威力を眼のあたりに見た同一民族の小高句麗国自身が此れに帰向するを遏止せんとしたもので、

かうした遼東対策としての軍団新設が懷遠や燕郡に迄及んでゐたのは、純通古斯系靺鞨諸族の入唐路が扶余から懷遠に至る街道であり、懷遠及びその背後の燕郡の固めが忽せに出来なかつたからである。つまり天宝初年に於ける平盧藩の軍団増加による大軍拡は、突厥帝国の瓦解を機として展開せられた東北辺外の形勢の急変、即ち従来の契丹・奚に代る渤海の強大化に即応したものであつたのである。此の大仕事を断行してのけたのは安祿山であるが、此の時既に彼が禍心を包蔵し、軍拡も一面に於いて決起の日に備へる意図を有してゐたか否かは明かでない。

營・平二州に在る在来四軍鎮の兵力は三万七千五百人で、一軍団の平均は九千余人となる。新設七軍団の平均が此の様に大きいものであつたとは考へられないが、然し鎮成の如き数百人以下の小規模なものでなかつたことも紛れない、天宝元年の十節度使管下諸軍鎮の兵数を見るに、劍南・嶺南の西南両境の二藩を除く北辺八藩に於いては一軍団の平均五千余(隴右)から一万余(范陽)にも達し、従つて一二千程度の小規模なものはむしろ稀である。所謂軍鎮のうちで軍は概して規模が最も大きく、天宝元年の北辺八節度使管下の軍を通観すると、千人程度のものも絶無ではないが概ね数千から多きは三万を越えてゐる者さへある。逆に守捉は概して規模が最も小さく、八藩管下のうちにも千人を割るものさへあるが、それは寧ろ例外的で、一般には少くとも千人を越え、多きは七千人を越えるものさへある、天宝以後増置の軍鎮はかうした平均規模を下廻つて小型化したかの觀があるが、それでも尚千人を割るのは例外的なものであつたと云へる。此の様に見て来ると、新設の平盧七軍団も補給その他の事情から一樣に大型であつたとは見難く、都護府の安東守捉、副都護兼任の保定軍、嘗て副節度使の治所となつてゐた懷遠軍等を除く他の四守捉は恐らく小型であつたであらう。小型四軍団の兵力合計を少く五千と仮定し、他の三軍団の合計を一万と見ても、少くとも一万五千には達してゐたこととなる。或はもつと多かつたかも知れない。とすれば忽ち問題となるのは、平盧藩の経済的弱體性からして、当然藩外からの補給であつた筈である。天宝年間に補給の爲めの陸海両運使が併置せられてゐた所以は此の軍拡に求む可きである。地理的に見て陸運使

は管平二州の四軍鎮の補給、海運使は都護府管域内の七軍鎮（但し懷遠軍は事情やや異なる）の補給を主としてゐたと考へられる。都護府管域内の兵力が補給を海運に依つてゐたことは安史の乱の推移に大きく影響してゐるので、敢て此所にそれを指摘しておく。

第六節 平盧軍節度使の強化と小高麗國の制圧

平盧軍節度使は玄宗が激動する東北辺外の形勢に対応して辺防を処理して行く為めの第一線武力機関として長城外遼西地区に育成したものであり、従つて平盧藩の推移には東北辺外の形勢の変化と此れに処する唐の対策とが常に反映してゐた筈である。平盧藩の沿革をその置廢・職責・構成・領州・軍団等から隣藩幽州節度使との關係に至る迄詳細に考察したのは、小高麗麗を中心としてその周辺に展開せられた東北辺外の大きな動きが唐朝に於いてどの様に把へられ、どの様に対応せられてゐたかを究明せんが為めである。東北辺外の形勢の推移そのものに就いては、突厥の興亡、契丹の暴掠、渤海・靺鞨の抗争等を中と心して既に詳考した所で、此所ではそれらの動きが平盧軍節度使にどの様に反映し、又本藩がどの様に対応して行つたかと云ふ点を考察の中心とする。先づ此れ迄に考説した平盧藩の沿革をその置廢・離合・領州・軍団等に就いて表示するに左の如くである。

平盧軍節度使年表

年号	西曆	置廢沿革	領州沿革	軍団沿革	備考
開元五年	七一七	置平盧軍			
同 七年	七一九	置平盧藩	營・遼・燕州・安東 護府（燕郡）		
同 一六年	七二八	此の頃より幽州藩の一元指揮		平盧軍・燕郡經略鎮 燕郡經略鎮は安東鎮守となる	
同 二〇年	七三二	廢藩。幽州藩に併入	遼・燕州廢止		是歲營州恢復

職任	平盧	室韋・靺鞨（渤海・黒水以下諸靺鞨）兩蕃（契丹・奚）小高句麗管内諸蕃等の控制鎮撫
	幽州	平盧を背後より支援（実動は主として奚・契丹との対抗）
天宝三年	七四四	幽州藩の一元指揮
天宝二年	七四三	都護府を遼西故郡城に徙す
天宝元年	七四二	獨立專任
同 二九年	七四一	幽州藩の一元指揮
同 二七年	七三九	復藩。獨立
同 二七年	七三九	平州増領
		盧龍軍・渝関守捉増領
		安東守捉東移。二軍五守捉増置

軍団は武力機関たる節度使の生命であるので、特に取出して左に表示しておく。

平盧軍節度使管下軍団表

州名	軍団名	設置年	西曆	設置地	現在地名	備考
營州	平盧軍	開元五年	七一七	營州治	朝陽県	
同	懷遠軍	天寶二年	七四三	順化州	四角坂土城	
同	安東守捉	開元七年	七一九	燕郡、後ち遼西故郡城	義泉	開元五年経略鎮。七年安東鎮守、天寶二年東移、安東守捉
同	保定軍	天寶二年	七四三	遼西故郡城附近?	義泉東方四十唐里	
同	汝羅守捉	同	同	汝羅城	大凌河下流右岸	
同	燕郡守捉	同	同	燕郡	義泉	
同	懷遠守捉	同	同	懷遠鎮	遼河下流右岸三岔口西方	
同	巫闕守捉	同	同	医巫閭山	北鎮（広寧）	
同	襄平守捉	同	同	通定鎮	遼瀋塔	

平州	盧龍軍	天宝元年	七四二	平州治	盧龍県	開元二年置營平鎮守。同七年北平守捉と改名。天宝元年升軍
同	渝関守捉	不	明	臨渝関	山海関西方十邦里	

表に就いて最も注目を惹くのは平盧藩が幽州と不可離の關係をもつてゐたことである。創藩から安祿山拳兵の天宝末に至る三十七年間（七一九～七五五）に於いて平盧藩の獨立時代は僅かに十三年、残りの二十四年は幽州の支配下におかれてゐる。かうした自主性の喪失は藩鎮に取つて最も致命的な打撃であり、それだけに最も深刻な辺外情勢の反映であつたと見なければならぬ。よつて此の幽州藩との離合を中心としつつ平盧藩の推移と辺外情勢との關係を考察して行くこととする。此の立場に立つた場合、平盧藩の沿革は大體四期に分つことが出来る。第一期は開元七年から十五年迄の九年間で、創置獨立の時代、第二期は同十六年から二十六年迄の十一年間で、幽州の一元指揮の時代、特に二十年以後は平盧の廢藩に迄進んでおり、第三期は二十七年から天宝二年迄の五年間で、中間に二十九年の一元指揮が挟まれてゐるが、大体に於いて復藩獨立の時代であり、第四期は天宝三年から十四年迄の十二年間で、幽州の一元指揮の時代である。

第一期は開元五年に契丹から奪回した遼西に平盧藩を創置し、滿洲への通路としての遼西を確保して契丹・奚・小高句麗・渤海・靺鞨諸部等を制圧し、それによつて大突厥帝国の左臂を切断すべき態勢を整へた時代である。遼西の奪回は先に則天武后の時これを喪失したその日から唐が宿願として来た所であり、それが開元五年に達成せられたのは、久しく唐を圧迫して来た突厥の巨酋默啜可汗が老衰して開元四年に部下に殺され、その後数年にわたつて突厥の活力に甚しい減退を來してゐたためである。此の期間の平盧藩の兵力は平盧軍・安東鎮守の二軍鎮と若干の鎮戍とより成る推定二万前後にすぎず、河西の赤水軍三万三千人、河東の天平軍三万人等に比すれば一軍にも及ばなかつた。かかる小藩が獨立よくその使命を果し得たのは、突厥の長年にわたる圧政への反撥として突厥の衰退を見た東北の諸小勢力が進んで唐に帰屬し

たからである。然し足下に勁悍を以て鳴る奚・契丹の本土を控へ、更に遠く滿洲の靺鞨に當る安東都護府を抱いてゐた平盧の職責は余りにも大きく、此れに対する二万前後の兵力は余りにも小さく、然も軍は補給の面から望み難く、ここに平盧藩の将来は多難なるべきことが予見せられてゐた。第二期は此の予見せられた危惧が現実となつて現れた時代である。

默啜可汗の老衰被殺によつて一時衰退した突厥は毗伽可汗の下に倍旧の勢を以て盛返し、塞外を制覇し、玄宗の大唐をも圧倒した。突厥の勢力を最も鋭敏に感受する契丹は忽ち此れに附し、その巨酋可突于註201の一派が開元十三年頃より不穩な動きを初め、奚も此れに同調し、開元十八年には親唐派の契丹酋長李邵固を殺し、唐から降嫁した彼の妻東華公主を平盧に奔らせた。平盧が開元十五六年の頃から幽州の一元指揮下に入り兩藩一体の作戰体制に入つたのは、平盧の過少兵力のみではかかる形勢に対抗出来なくなつたからである。契丹・奚の跋扈は益々甚しく、唐は開元二十年に大征討軍を起して決戦を挑んだが、可突于は巧に遠遁して銳鋒をかはしただけで、唐軍班師の翌二十一年には早くも来寇した。二十年の平盧の廢藩、幽州への併入はかうした契丹・奚の暴掠に対する非常対策の意味をもつ。尚此の唐側の非勢は渤海にも利用せられ、唐の東北靺鞨は益々危ふくなつた。即ち大唐が開元十三年に黒水靺鞨と提携して滿洲政策を強化せんとしたことに不満を抱いてゐた渤海は、開元二十年に至つて山東の登州に入寇し刺史を殺して氣勢をあげた。明かに唐の平盧・幽州二藩の兵力が契丹・奚に引きつけられてゐた虚に乗じたものである。平盧の廢藩、幽州への併入はかうした面からも促進せられたものと思はれる。平盧に対する幽州の一元指揮は大藩幽州の兵力をも平盧の兵と共に第一線部隊とし、その巨大な力を以て非常時を切抜けしめんとしたものである。

かうした東北辺の危急を救つたのは二十一年に幽州節度使となつた張守珪で、急攻をさけた彼は漸次可突于を迫ひつめ、二十三年正月、窮境に陥つた可突于は部下に殺され、その首は洛陽に伝へられた。此の報は忽ち渤海の態度に影響し、

十九年以来唐への入貢を絶ち二十年には侵寇さへしたものが、二十三年には再び修和朝貢することとなつた。今迄契丹・奚との攻争に専用せざるを得なかつた平盧の兵が東方に転用せらる可き可能性を生じた為めと思はれる。但し突厥の全盛は尚続いてゐたので、それを背景とする契丹の侵暴も止まず、余党泥礼等の動きがあつて油断は出来なかつた。¹¹²⁰²突厥が衰退期に入つたのは開元二十七八年の頃で、二十九年には登利可汗の被殺によつて急に土崩瓦解して終つた。二十七年に平盧藩が復置せられ、然も独立してゐるのは、突厥の衰退潰散によつて唐の塞外に対する制覇が全面的に恢復せられ、平盧の正面も静穩に向つて行つたからである。前後十年を越える契丹の侵暴、此れに乗ずる渤海の横暴に対し、平盧藩の兵力を増強して對抗することが出来ず、その軍団が依然平盧軍と安東鎮守との二に止まつてゐたのはやはり補給面からの制約に由つたのであらう。平盧藩が幽州藩の一元指揮下に移され、更に情勢の深刻化と共に廢藩合体の処置を受けたのは、平盧の軍拡が困難な事情の下に遼西地区の戦力を補ふ為めには幽州藩を第一線の責任藩に押し出すことによつてその兵力を遼西の戦線に投入せしめる外なかつたからであらう。然し此の体制は対契丹・奚戦には効果をあげ得たにしても、遼河以東の満洲勢力に対しては効果薄であつたのではないかと思はれる。

平盧藩の当時の二軍鎮は營州と燕郡とに在つた。共に遼西地区の西部に在り、契丹・奚の住地に联接すると共に幽州藩の北境からも比較的近かつた。従つて契丹・奚の暴掠に対しては平盧軍・安東鎮守の両兵力を以て対応しつつ幽州藩軍の出勤を俟つ作戦が立てられたが、遼東からの脅威に対しては遼西地区東部に此れを防遏すべき軍団の配置がなく、況んや幽州藩兵の出勤には長大な距離がありすぎて速急の間に合はず、いはば東に対しては裸に近い状態であつた。若し契丹・奚の問題が無ければ安東鎮守の兵を、足りなければ平盧軍の兵を東境に差遣し、その間に幽州藩の出勤を整へることも出来たが、契丹・奚に平盧・安東の兵を釘付けせられた場合の遼西地区の東境は全く無防備同然に陥らざるを得なかつた。平盧藩の兵力過少が齎す作戦上の此の缺陷は契丹の可突于の侵暴に乗じた渤海の開元二十年に於ける唐の山東への侵寇によ

つてまざまざと露呈せられた。此の事件は平盧藩のあり方に就いて再検討すべき大きな教訓を与へた筈である。平盧藩の第三期、即ち開元二十七年から天宝二年迄は此の缺陷が反省せられ補強せられた時代である。

開元二十七年から天宝二年迄の復置独立期間に於ける辺外最大の事件は開元二十九年に於ける突厥の潰滅消散とそれに伴つて惹き起された塞外の動揺とである。開元二十九年の一时的な幽州一元指揮は明かに此の突厥の潰散に因る辺外の動揺に備へたものであるが、結局平盧の辺防を直接脅かすが如き發展はないことが看取せられ、依つて間もなく分離独立に戻されてゐる。但し此所に警戒すべき新事態が滿洲に生長しつつあつた。渤海の發展がそれである。渤海は突厥の滅亡に乘じ、その宿願たる純通古斯系靺鞨諸族を併吞すべく直ちに北進を開始し、忽ちにして鉄利・越喜・扈涅等の諸族を征服して直轄領民とし、その反抗分子を唐に逐ひ、小高句麗國に帰屬せしめた。渤海の膨脹政策は一応此の線で停止したが、然し此れによつてその国力を大いに増強した。今や突厥亡き後ちの唐朝に取つて塞外の強敵は西の吐蕃と東の渤海となつた。渤海の進撃は純通古斯系靺鞨諸族の併吞を以て一応は停止したが、それは明かに新占領地域の整備の爲めで、それが終れば何時進撃を再開するかわからない危惧があつた。そしてその進撃の絶対目標とせられるのは外ならぬ小高句麗國であることと火を睹るより明かである。小高句麗國民は渤海と全くの同族であり、その領域は地続きであり、又嘗ては大高句麗國民として主権を共にしてゐた間柄である。両者の接近融合の要素は多分に存在してゐたと云へる。嘗て唐が突厥を背景と恃む契丹の侵暴に苦しめられるや、忽ち此れに乗じて唐を侮り山東に侵寇し、又突厥が滅んで純通古斯系靺鞨諸族がその支柱を失つたと見るや忽ち進撃して彼等を併吞する等、渤海の機を見るに敏な過去の外交駆引を経験した唐が今や強大国となつた渤海の西進を憂慮するは当然で、此の立場からの平盧藩の再編制が考慮せられたとしても不思議はない。

平盧藩の今迄の缺陷は東境の兵備が手薄であつたことである。創藩当初の唐の考へでは、平盧軍を以て契丹を、安東鎮守を以て小高句麗方面を受持たせつつ、互に協力せしめる方針であつたに相違なく、恰も突厥が中衰期に当り、渤海も建

國後日尚浅かつた開元の初めに於いては唐の此の構想で略々支障なかつたであらうが、突厥が復興するや忽ち行詰りを露呈することとなつた。内に国力を蓄積しつつあつた渤海は平盧藩の全兵力が契丹に釘付けせられた機会を擱んで唐に挑み、契丹と渤海との攻勢を一度に引受ける形に於いて唐は渤海に巧に引きかき廻されたのである。此の苦い経験は平盧藩の軍団配備を契丹・奚と渤海とに對する同時両面作戰に堪へ得る体制に組み直す必要を痛感せしめ、かくてこそ滿洲勢力に對する唐の睨みが初めて有効となることを覚らしめた筈である。天宝元年に先づ長城内平州の盧龍軍・渝関守捉の二軍団一万三千人を平盧藩の所屬に移して奚・契丹の急に備へる兵力を増強し、かくて兵力に裕りを生じた筈の平盧軍一万六千人の一部及び恐らくは安東鎮守八千五百人の大部分を東に移し、此れに新募の兵を加へて遼西地区の東境に七軍団を増置し、その中心に都護府を進出せしめて東境の兵備を固めたのは、正に上述の如き渤海強大化の新狀勢に對処したもので、新增の諸軍団は小高句麗との國境に隣接し、此の國を対象とする外形をとつては居たが、その実は遠くその背後の渤海を睨み、その小高句麗國への進撃を牽制してゐたものと考へられるのである。

此の様な平盧藩再編成の大仕事はすべて天宝二年迄の獨立時代に行はれたものである。そしてそれが一段落するや更に幽州との恒常的な一元指揮の体制に移され、此所に平盧藩は天宝三年より十四年末迄の長い一元指揮の時代、即ち第四期の時代となるのである。兩藩の一元指揮が東北の辺防にその威力を最も有効に發揮せしめる体制であることは、既に過去の体験によつて実証せられてゐた所である。天宝年間の唐の東北政策は重點を小高句麗國の背後にある新強國渤海への對策に移向し、平盧藩の兵力増強、軍団配備の再編、幽州藩との一元指揮の恒常化等によつて、彼等に對する制圧力を未曾有の強さに迄引上げてゐたのである。天宝年間の小高句麗國が唐朝への專屬態度を強く表明せざるを得なかつたことは云ふ迄もあるまい。

天宝初年の平盧藩の兵力拡充、軍団再編等は突厥の潰散、渤海の大發展等の新たな形勢の展開に對処する必要措置であ

り、且つ滿洲勢力の制圧に大いに役立つた所である。此の大仕事を仕遂げたのは安祿山で、彼が拔擢せられて幽州節度使に榮転したのは当然と云へる。従前の慣例に於いても平盧で成績を挙げた者は幽州に榮転して居り、亦彼が幽州に榮転と同時に平盧を兼領したのも兩藩の一元指揮の際に先例として既に行はれて来た人事である。つまり安祿山の行状や進退は、客觀的に必要且つ重要な大仕事を成功裏に成し遂げ、その功績によつて慣例的な榮転進路を經上つて行つたもので、異常異例なものではない。然し結局は強化拡充せられた兩藩の兼任から彼の謀叛が起されたのであつて、最大の禍根は彼の兩藩在任が余りにも長すぎたことに在ると云へよう。それには又それとしての理由のあることであるが、此所に論及する必要はあるまい。平盧の強化再編が滿洲の制圧に役立つたのは僅かに天寶の十余年間、天寶十四年十一月の安祿山の挙兵を以て逆に大きく後退することとなるのである。

註

192 新唐書卷三九地理志に同じ記事あり。

193 滿洲歴史地理第一所収、松井等氏「隋唐二朝高句麗遠征の地理」による。
註193に同じ。

194 東亞論叢第三輯所収、同氏「遼西の交通路に就いて」参照。
195 滿洲歴史地理第一所収、稻葉岩吉氏「漢代の滿洲」、同箇内互氏「三國時代の滿洲」及び「晉代の滿洲」、「南北朝時代の滿洲」等による。

198 197 註193に同じ。

199 史淵第四二輯所載の拙稿「粟末靺鞨の対外關係」の第一節第三項「粟末靺鞨と契丹との關係」参照。

遼代の遼州に就いては、遼の太祖阿保機の遼東經營と聯関し

て更めて詳考する予定である。

以上、遼関に就いては註193の論文参照。

201 200 可突子は韓愈の烏氏先廟碑、資治通鑑等には可突干に作り、新旧唐書の契丹伝や唐会要の契丹の項等には可突干に作つてゐる。松井等氏は滿鮮地理歴史研究報告第一冊所収の「契丹勃興史」の註28に於いて白鳥庫吉博士の説を引き、干は Kan, Khan, Han の対音であるから、干が正しく、干は字形の酷似から来た訛伝であると論断してゐる。

202 以上、契丹の侵暴に就いての概説は主として旧唐書卷一九九契丹伝に拠つた極めて粗略なものである。詳しくは註201の「契丹勃興史」を参照。尚此の間に於ける渤海の唐に対する挑戦は既に前に論述した所である。

**The Upbringing of Ping-lu (平盧) Chieh-tu-shih
(節度使) by Hsüan-tsung (玄宗) and Small Kao-
chü-li (小高句麗國)**

(continued)

Kaizaburō HINO

Until the 29th year of Kai-yüan (開元)—741 A. D.— Ping-lu-fan (平盧藩) had had nothing but two army corps. But in the following year—the 1st of Tien-pao (天寶)—two army corps in Ping-chou (平州) (inside the Great Wall of China) were transferred from Lu-tung-fan (盧龍藩) to here, and in the 2nd of Tien-pao—743 A. D.— seven army corps were established more at the area of Liao-hsi (遼西) (outside of the Great Wall). These seven army corps were all stationed in the east of Liao-hsi, between the Ta-ling-ho (大凌河) and the Liao-ho (遼河), except one unknown army corps. It was a treatment for the following facts.

The forces of nomadic tribes were weakened by the fall of Tu-chüh (Türküt). As Po-hai (渤海) in the inner area of Manchuria had become strong, it happened the fear of their invasion to Small Kao-chü-li (小高句麗國), the center of which was Liao-yang (遼陽).

It was An-lu-shan (安祿山) that achieved the expansion of armaments in Ping-lu-fan. By this expansion he strengthened the control of Tang (唐) to Manchuria. But after about ten years, he conspired against the state. The force of army for the foreign countries in this area immediately broke down.